題：「豊太郎は悪くない」

動機：授業で一度みんなで感想を書いたとき、「エリスを裏切った豊太 郎は最低だ。」、「誰かに従う事しか出来ない弱いやつだ。」といった否定意見が多かったが、本当にそこまで悪い奴だったの か。と疑問を持ったので自分なりに考えてみようと思ったから。

進め方:まず、豊太郎は初めからエリスを裏切る気だったのか。という ことについて述べ、次に豊太郎が帰国へと進んで行く事になるきっかけとなった一度目の相沢との接触場面を中心に本文を元にして、豊太郎について考える。

結論：豊太郎はエリスを本気で愛していて、帰国することになったのは、相沢を「良き友」と思い続けていたことで、自我に目覚めていた自分を日本にいた頃の性格に戻されてしまったことが原因であり、豊太郎自身は、エリスを裏切ってしまった事実を背負って悩み続けて生きていかなければならない悲しい人物である。

【本論】

まず、豊太郎は本当にエリスが好きだったのか。ということだが、これは豊太郎、エリスのお互いに想い合っていたことに間違いない。相沢にエリスと別れ日本に帰国することを勧められたとき、「貧しきが中にも楽しきは今の生活、捨て難きはエリスが愛」と述べていることから、豊太郎はドイツでの生活を好み、エリスを愛していたことが分かる。豊太郎がこのように思えるようになったのは、豊太郎の解職と日本へ残してきた母の死が大きな要因であると思う。
自我に目覚めエリスを好きになった豊太郎であったが、日本への忠誠心、日本にいる母への想いが有ったため、エリスとは師弟のような一定の距離をおいた関係であった。しかし、この豊太郎を縛りつけていた二つの要因が無くなったことで豊太郎の日本との繋がりが無くなり、事実上自由の身となった。また、その状況で帰国をしていれば、「学成らずして汚名を負ひたる身の浮かぶ瀬あらじ」というように、日本では不名誉な行いをしたとして批判をくらうだけであるから、日本へ帰りたいという気持ちは弱いはずである。
さらに、豊太郎は、「余が彼を愛づる心のにはかに強くなりて、つひに

離れ難き仲となりしはこの折りなきり」と述べているように、それらの出来事の後からエリスに対する気持ちが一気に強くなっていたと考えられる。

次に、豊太郎は自分から望んで帰国を決意したのか。ということについて、豊太郎は好んで帰国を選択したわけではないと思う。
豊太郎は大臣と会うことになったとき、「政治社会などに出ん望みは絶ちしより幾年をか経ぬるを、大臣は見たくもなし。・・・友にこそ会ひには行け」と述べている。これはエリスを心配させないための言葉と思えるが、法科の講義を受けず、文学などに興味を持つようになっていたことから、これは豊太郎の本心であり大臣に会うことで元のエリート生活に戻れるかもしれないという考えは持っていなかったと考えられる。
しかし、実際に大臣、相沢と会った豊太郎は、「友に対してはえ答えぬ」性格と大臣の下で仕事をしたことでエリート時代の感覚を思い出してしまったことから、日本への帰国、エリスとの別れに向かってしまうことになってしまったのである。
相沢との対談で相沢は、大臣は豊太郎の語学力を利用せん心のみなりと述べているが、これは、相沢自身も同じ考えをもっていたと思う。
相沢は二人の恋を「人材を知りての恋にあらず」つまり、知識ある者と無知の者、あるいは地位の高い者と低い者が恋をするのはふさわしくない。と人を能力で評価していることが分かる。これは、ドイツで自我に目覚め、地位よりもエリスを取るようになっていた豊太郎とは異なる価値観である。豊太郎は相沢を良き友と思っていたことで、自分にとって最善アドバイスをしてくれるだろうと信じてしまっていたと思う。相沢は日本では豊太郎の良き友だったかもしれないが、日本の思想感をもつ相沢と、ドイツで新しい思想感を得た豊太郎とでは理解し合えない壁が出来てしまっていた。
しかし、この壁に豊太郎が気づかずに相沢を自分の良き友と信じきって返事をしてしまったことがエリスと別れることになる始まりとなったのである。
そして、その後大臣とのロシア行きで通訳という「生きた辞書」として働かされることで、忘れ去っていた日本にいた時の感覚が戻ってしまった。それにより、大臣に帰国を提案されたとき、目上の人物に従ってしまう性格によりつい承諾してしまったのだと考える。
それから豊太郎とエリスの関係は別れに大きく進んでしまい、豊太郎を

精神的に追いつめることになる。
豊太郎は「我が胸中にはただただ、我は許すべからず罪人なりと思ふ心のみ満ち満ちたりき」と大臣の要請を受けてしまったことがエリスとの別れになることになったことを「許すべからず罪人」と感じ悩むことになるのである。このことから豊太郎は、決して自分の判断が良かった。エリスとの別れを意識しながら返事をした。ということはないと思う。つまり豊太郎にとってはエリスを騙し続けていたのではなく、帰国を承諾してしまった後にエリスと別れなければならないということを強く意識しだしたのだと思う。
エリスとの別れは豊太郎の想像していたことではなく、豊太郎自身にとっても突然起こったつらい出来事だったのである。

【まとめ】
豊太郎が帰国を選んだのは、自らが強く望んだ結果ではなく、相沢や大臣ら日本の思想を持つ人物を接してしまい、それらを拒まなかったことで忘れ去っていた性格を思い出してしまったせいで、自己を貫くことが出来なかった結果である。
みんなの感想では、最低だ。弱い奴だ。というのが多かったが、単に悪い人物であるとはいえないと思う。
集団から離れ独りで何かをするということはとても難しく不安を感じることであるから、つい集団に戻って周囲に合わせてしまうということは、自分の経験からしても理解できないことはない。
そして、豊太郎自身は相沢を疑うことも責めることもしなかった良い人物で、エリス裏切りのすべての責任を背負い悩み続け生きていかなくてはならない悲しい人物である。

参考資料：教科書、現代語訳、ホームページ「俺流舞姫評論」